

独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業

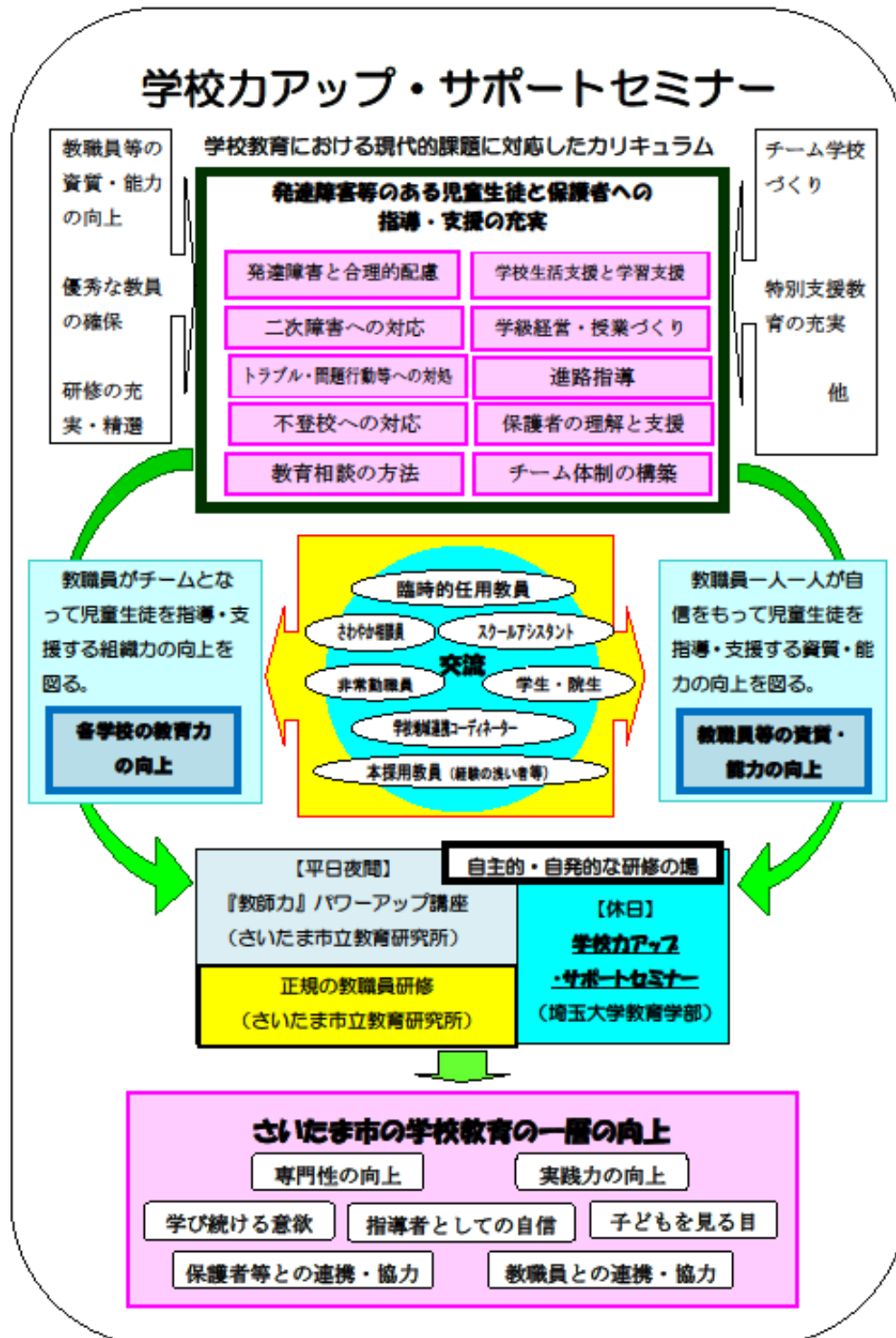
実 施 報 告 書

プログラム名	学校の教育力アップのための「学校教育における現代的課題に対応した 研修カリキュラム」の開発
プログラムの 特徴	経験の浅い教員や本採用を目指す臨時的任用教員、研修の機会が少ない非正 規採用教職員等が交流しながら、発達障害等のある児童生徒とその保護者への 指導・支援の充実やチーム学校への理解を促し、教員としての資質・能力及び 学校力の向上を目指す。本プログラムは休日に年10回、実践センターを会場に 大学関係者や専門的分野の方々を講師に、講義と演習を組み合わせたり実践事 例を取り上げたりして、実践的な研修を行う。

平成30年3月

機関名	連携先
埼玉大学	さいたま市教育委員会

プログラムの全体概要



I 開発の目的・方法・組織

1 開発の目的

さいたま市教育委員会（以下、「市教育委員会」）では、平成 21 年度より特別支援学級の設置を計画的に行っている。ここ 8 年間では特別支援学級が 61.7%増加しており、平成 29 年 4 月現在 86.9%の設置率になる。一方、平成 24 年に文科省が実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」の結果では、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒の割合は約 9.1%で、全国平均の約 6.5%を上回っている。また、平成 24・25 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム「教職員のキャリアアップのための学校教育における現代的課題に対応した研修カリキュラムの開発」では、設定テーマに沿って教職員が学校教育における現代的課題に関する多くの知識を得ることができたが、速攻性や実効性には課題が残った。そこで、今回はこれまでに作成した教材等を改善し活用するとともに、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れ、技能を高める演習を充実させる内容に拡充する。さらに、平成 25 年度の参加人数はのべ 190 人で、平成 24 年度の 106 人を上回ってこそのいるが、同一人物が繰り返し参加している状況がみられるため、より多くの教職員等の参加を促していく必要がある。そこで、市教育委員会や市立小・中学校長会と連携を強化し、広報活動を充実するとともに、推奨する参加対象者を例示するなど、単発でも参加しやすいプログラムを計画した。

現在市教育委員会では、本採用の教員だけでなく臨時的任用教員や児童生徒の学習面や生活面を指導・支援するスクールアシスタント、教育相談を担うさわやか相談員、学校地域連携コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの非正規採用教職員がおり、正規採用教職員と共に直接児童生徒を指導・支援している。市教育委員会では正規の教員研修や平日夜間の自主研修「『教師力』パワーアップ講座」を開設しているが、学校の一翼を担っている非正規採用教職員については、雇用形態等の関係により、十分な研修の機会を確保するのは難しい現状である。そこで本プログラムにより、市教育委員会の研修体系を補完するとともに、非正規採用教職員が正規採用教職員になるための養成の充実にも努める。

これからの学校の在り方として、平成 27 年 12 月に中教審に答申された「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策」では、学校において子どもが成長していく上では、教員に加え、多様な価値観や経験を持った大人と接したり、議論をしたりすることにより、より厚味のある経験を積むことができ、本当の意味での「生きる力」の定着につながるとしている。そこで、本プログラムの実施により、学校教育に関わるすべての教職員の専門的な知識・技能の習得のみならず、勤務意欲の向上を図り、すべての教職員が学校の教育目標の実現に向けて連携・協力して力を発揮できる人材の育成に努める。

2 開発の方法

参加対象は、さいたま市立小・中・特別支援学校に勤務する、すべての教職員等とした。例えば、特別支援教育担当や経験の浅い教員、臨時的任用教員、さわやか相談員、スクールアシスタント、スクールカウンセラー、学校地域連携コーディネーター、日本語指導員等である。また、埼玉大学学生・院生（さいたま市立学校での勤務を希望する学生）や、その他希望する教職員や学生・院生なども対象とした。また、参加者が受講しやすいように土曜日の午後に会場を固定し

て研修日を設定した。

方法は、テーマを「発達障害等のある児童生徒と保護者への指導・支援の充実 ～チームとしての組織的対応を効果的に行うために～」とした。その指導に当たっては、本学の教員のならず、他大学の教員や今学校現場で活躍している教員などに依頼することとした。また、研修の構成を講義（input）と演習（output）の二部構成とした。さらに次回まで1か月程度の期間をおき、実践（outcome）の場を確保するようにした。

① 専門的な知識・技能に関わる講義

講師には大学の教員や専門家、実践者などを迎え、パワーポイントや手元の配付資料をもとに前半 70 分～80 分程度の講義を行った。また、事前に講師に推薦図書を伺い、それを閲覧・貸し出しできるようにした。これにより身に付けたい資質・能力の「専門的な知識や技能」、「児童生徒を見る目」、「保護者等との協力」がはぐくまれると考えた。

② 多様な職種者同士による演習及び協議等

研修の後半では、事前に様々な職種が混在するよう4人～6人程度のグループを作成し、講師が提示した事例やテーマについてそれぞれの職種に応じた対応や考えを話し合ったり、実践的な活動を行ったりする演習や協議等を行った。その後、講師からのまとめや質疑応答を行った。これにより身に付けたい資質・能力の「学び続けようとする意欲」、「実践的行動力」、「教職員としての自信」、「（多様な職種の）教職員との協力」がはぐくまれると考えた。

3 開発組織

さいたま教育コラボレーション推進委員会・教員研修専門部会の部員を中心に組織を構成する。

No	所属・職名	氏 名	担当・役割
1	〈さいたま市教育委員会〉 教育研究所・所長	千葉 裕	〈さいたま教育コラボレーション推進委員会〉 推進委員
2	教育研究所・主席指導主事兼所長補佐兼管理係長	深津健太郎	事務局（教員研修専門部会部会長）
3	教育研究所・主任指導主事兼研修係長	安島 俊之	事務局（教員研修専門部会部員） 運営
4	指導1課・主任指導主事兼研究推進・振興係長	中野 緑	事務局（教員研修専門部会部員）
5	〈埼玉大学〉 埼玉大学・教授（学部長）	細渕 富夫	推進委員長
6	埼玉大学・教授（副学部長）	山本 利一	推進委員（教員研修専門部会副部会長）
7	埼玉大学・准教授	小倉 康	推進委員
8	埼玉大学・教授（専門職学位課程専攻長）	澤崎 俊之	推進委員（教員研修専門部会）
9	埼玉大学・教授（教育実践総合センター）	尾崎 啓子	企画・立案・運営
10	埼玉大学・教授（教育実践総合センター）	河野 秀樹	推進委員（教員研修専門部会） 企画・立案・運営

H29.1：教員養成に関わる諮問会議での説明、教員研修専門部会での検討

H29.2：市教育委員会幹部及び担当課等への説明、小学校校長会会長及び中学校校長会会長への事前説明

H29.3：さいたま教育コラボレーション推進委員会での説明、附属教育実践総合センター運営委員会での説明、市教育委員会へ採択結果の報告

H29.4：担当者との連絡・調整等、中学校校長会役員研修会、中学校校長会研究協議会、校長学校管理研修会、小学校校長会幹事会での説明、学校地域連携コーディネーター打ち合わせ会での説明

H29.5：担当者との連絡・調整及び開催案内の周知、初めて教職に就く臨時的任用教員研修会での説明

H29.6：担当者との連絡・調整等、小学校校長会理事会での説明

H29.7：担当者との連絡・調整及び開催案内の周知

H29.8: さいたま教育コラボレーション推進委員会での実施報告と意見聴取
H29.9: 担当者との前期の反省及び連絡・調整、中間報告書の作成
H29.10: 担当者との連絡・調整等
H29.11: 担当者との連絡・調整及び開催案内の周知、中学校長会役員研修会、小学校校長会幹事会での報告
H29.12: 担当者との連絡・調整等、市教育委員会担当者と先進事例の視察
H30.1: 担当者との連絡・調整等
H30.2: 担当者とのこれまでの反省及び連絡・調整等・研修専門部会で事業の成果と課題の検討
H30.3: さいたま教育コラボレーション推進委員会での実施報告と意見聴取

既存のさいたま教育コラボレーション推進委員会の組織を活用し、運営に関しては月1回程度担当者が連絡・調整等を行いながら実施した。

II 開発の実際とその成果

1 学校力アップ・サポートセミナー

(1) 研修の背景やねらい

さいたま市立学校の教育力をアップさせるために、教職員等が発達障害等のある児童生徒とその保護者への指導・支援についての資質・能力を向上することや、チームとして学校の組織で対応する力を高めることを目的とする。

(2) 対象

さいたま市立小・中・特別支援学校に勤務する、すべての教職員等（特別支援教育担当や経験の浅い教員、臨時的任用教員、さわやか相談員、スクールアシスタント、スクールカウンセラー、学校地域連携コーディネーター、日本語指導員等）・埼玉大学学生・院生（さいたま市立学校での勤務を希望する学生）、その他、希望する教職員や学生・院生など

(3) 会場

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター2階会議室

（埼玉大学教育学部附属小学校敷地内）さいたま市浦和区常盤6-9-44

(4) 内容の配置

回数	平成25年度キャリアアップ・サポートセミナー	平成29年度学校力アップ・サポートセミナー（案）	平成29年度学校力アップ・サポートセミナー（実際）
1	通常学級における特別支援教育	発達障害と合理的配慮	発達障害と合理的配慮
2	学校巡回相談支援から見てきた課題	学校生活支援と学習支援	学校生活支援と学習支援
3	コミュニケーションスキル	二次障害への対応	二次障害への対応
4	保護者にできる支援	不登校への対応	学級経営・授業づくり
5	ストレス・マネジメント	トラブル・問題行動等への対処	トラブル・問題行動等への対処
6	学習指導	進路指導	進路指導
7	進路指導	学級経営・授業づくり	不登校への対応
8	非行・問題行動	保護者の理解と支援	保護者の理解と支援
9	不登校対応	教育相談の方法	教育相談の方法
10	事例研究	チーム体制の構築	チーム体制の構築

平成25年度実施の内容をもとに、テーマに即してより現在の教育現場のニーズ（「困っていること」「学びたいこと」）を考え、実践的な内容を担当者で洗い出し、平成29年度実施（案）とした。その後、校長会等での説明の中で、「学級経営・授業づくり」は年度の早い時期に行った方がより実践的であるとの指摘を受け、調整した。

(5) 研修の実際

《第1回》 発達障害と合理的配慮（概論） 一人に応じた教育実践と合理的配慮を考える

- (1) 開催日時 平成29年6月17日(土) 14:00~16:30
- (2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 講師 東京学芸大学教育実践研究支援センター 教授 橋本 創一 先生
- (4) 内容 障害の特徴や支援の方法、合理的配慮等、発達障害に関する基礎的な知識を身に付ける
- (5) 参加者 36名
正規採用教員：15名（管理職：1名 特別支援学級等：14名 その他：0名）
臨時的任用教員：2名 さわやか相談員：3名 スクールアシスタント：5名
非常勤講師（GS）：1名 学校地域連携コーディネーター：2名
チャレンジスクール関係者：1名 キャリアカウンセラー：1名
大学院生：5名（うち2名は現職教員） 教育委員会指導主事等：1名
- (6) 参加者の評価
- ①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 十分理解できた | : 19名 | B おおむね理解できた | : 14名 |
| C あまり理解できなかった | : 0名 | D 理解できなかった | : 0名 |
- ② 今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 積極的に交流できた | : 18名 | B おおむね交流できた | : 12名 |
| C あまり交流できなかった | : 3名 | D 交流できなかった | : 0名 |
- ③ 今回の研修会に参加して、満足度はどの程度でしたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 十分満足できた | : 20名 | B おおむね満足できた | : 13名 |
| C あまり満足できなかった | : 0名 | D 満足できなかった | : 0名 |
- ④ 今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。
- | | | | |
|-----------------|-------|---------------|------|
| A 十分意欲が高まった | : 25名 | B おおむね意欲が高まった | : 8名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 0名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |
- (7) 参加者の感想（主なもの）
- スクールアシスタントとして勤務するようになり、様々な児童にどのように接し、支援していけばよいか、いつも考えていました。このサポートセミナーで、より多くの知識を得て、今後の活動に役立てられれば良いと考えています。なんとなく知っている…といった、ぼやけたあいまいな知識が少しはっきりしてきたように感じました。さらに理解を深め、支援指導に役立てればと思います。ありがとうございました。
- 講義より、日々の指導・支援を振り返ることができました。もしかしたら…と子どもたちを広い視点で見取り関わっていくことが大切だと感じました。学級には支援を要する児童が多数いますが、心にゆとりをもって、子どもたちに寄り添っていきたいと思います。
- 橋本先生のお話は、医学的、法的な根拠から、具体的な子どもの困り感まで、幅広く、とても勉強になりました。トラブルのきっかけをさぐり、クラスの子にしてほしい事についても、本人が納得できるように解決方法を探っていくというお話は、こうした子たちの社会スキルを高めていくのに大切と感じました。
- 発達障害と睡眠障害が関係あることに驚きました。自分が担当している児童にも関係しているように思ったので、今後に生かしていこうと思います。自分では理解しているつもりでも、「実際の指導」に生かしきれていないんだな、と思うことが講義の中で分かりました。「ほめる」「とりあえずやってみる」を忘れずに、来週から指導していこうと思います。
- 今までこのような研修を受けたことがなかったので、大変勉強になりました。特に印象に残ったのは、迫害体験の少ない子は大人になってうまくやれているというお話でした。二次障害を大きくしないために必要な支援をしていけるよう、心掛けたいと思います。グループワークもいろいろな現場の話が聞け、非常に有意義でした。

- 多くのことを学べた研修会でした。講義の中で聞いたことを活用していきます。ほめる重要性については前から意識していましたが、今回の研修でさらに意識していこうと思いました。今年から働き始めたので、良い学びの機会として、これからも参加していこうと思います。

〈講義〉（８５分）

1. “合理的配慮”とは

- 本人や家族が支援の希望を出し、支援者の要望も加えて双方で話し合い、理にかなった変更や調整が行われるもの。配慮する側にも合理的である。実施しない場合、説明責任があり、なぜ実施しないのかについて説明可能であることが重要。通常学級や特別支援学級や特別支援学校でも同様。

2. “発達障害”と診断

- どこまでを“発達障害”とするか

診断をもつ子に加えて、診断を受けてない子にも課題が大きい場合がある。

文部科学省では「特別支援教育の対象となっている児童生徒」とすることになった。

- 診断

日本では主に DSM- v（2013）の診断基準を用いられる。改訂により発達障害の診断基準に変更点がある（2013 年 5 月発表）。

- A) 発達障害が大きく 2 分割
- B) 自閉症スペクトラム障害（ASD）として一本化
- C) ASD の診断基準として、感覚過敏が追加された
- D) 知的障害の程度が、IQ ではなく、生活の困難さに変更
- E) 行為障害が ADHD と切り離されて、独立した分類が新設
- F) ADHD と ASD など、二つの診断名の併用が可能



3. 実際の支援

- 発達障害という言葉にひきずられずに、「この子にはどんな力があるのか、どんなサポートがよいか」に目を向ける。

- 二次障がい大きくしないために

幼少期に迫害体験が少ない子は、成人期での適応がよいことが報告されている。

注意・叱責しない。（海外の研究では盛んに行われている）注意しすぎは良くない。

- 感情のコントロールを行うことが大切

トラブルが頻繁に起こる子は、対人トラブルについてのきっかけがあることが多い。

周囲との関係でトラブルが生じている場合もあるので、きっかけを明らかにし、きっかけを作らないことが大切。

- ツールを使っていく

タイマーや手持ち用、写真カード。スケジュール管理。必要な子に合理的配慮を行うとよい。

4. 校内支援体制の構築

- 校内の連携・支援体制の確立

教職員が仲良し！なことが大切。よく話す（情報交換）。意見を取り入れる（共通理解）。

一緒にやる（協働）。まかせる（分担）。立ち話会議。単独プレイヤーよりチームリーダー。

〈演習（グループ協議）〉（５０分）

学校で実際に行われたこれまでの支援で、①保護者との連携や校内連携でうまくいった事例の紹介、②保護者連携や校内連携をうまくいかせるためのポイントは何か、について協議した。

- 子どもへのアプローチだけではなく、保護者へのアプローチにより子どもの行動が改善した事例。

- 毎日の保護者の送迎によって特別支援教員と顔を合わせた連携が可能だった事例。

・保護者と連携するときは、コミュニケーションをとる。良いことだけでも連絡する。

・たくさんの人がかかわるが、任せるのではなく繋げていくことが大切。

《第2回》 学校生活支援と学習支援

- (1) 開催日時 平成29年7月8日(土) 14:00～16:30
- (2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 講師 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 長江 清和 先生
- (4) 内容 発達障害等のある児童生徒への学校生活の支援と学習の支援について、適切な指導や支援の方法を身に付ける。
- (5) 参加者 30名
正規採用教員：13名(特別支援学級等：8名 その他：5名)
臨時的任用教員：3名 さわやか相談員：3名 スクールアシスタント：7名
学校地域連携コーディネーター：1名 キャリアカウンセラー：1名 大学院生：1名
教育委員会指導主事：1名
- (6) 参加者の評価
- ①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 十分理解できた | : 15名 | B おおむね理解できた | : 12名 |
| C あまり理解できなかった | : 0名 | D 理解できなかった | : 0名 |
- ②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 積極的に交流できた | : 11名 | B おおむね交流できた | : 15名 |
| C あまり交流できなかった | : 1名 | D 交流できなかった | : 0名 |
- ③今回の研修会に参加して、満足度はどの程度でしたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|-------|
| A 十分満足できた | : 15名 | B おおむね満足できた | : 10名 |
| C あまり満足できなかった | : 1名 | D 満足できなかった | : 0名 |
- ④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。
- | | | | |
|-----------------|-------|---------------|-------|
| A 十分意欲が高まった | : 16名 | B おおむね意欲が高まった | : 10名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 0名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |
- (7) 参加者の感想(主なもの)
- “障がい”と聞くとどうしてもそういう目でみているなぁと今日の講義を聞いて考え直しました。一人ひとりの困っているところ、得意なところなどをよく見て、その子がどういう支援をすれば自立に向けて成長していけるのか、もっと考えていかなければならないなぁと思いました。通常学級だと、どうしても気になる子への支援が十分にしていられないこともあるので、アセスメントも活用して一人ひとりに合った支援が出来たらなぁと感じました。
- 現在の職になり、発達に障害のある子どもたちと関わる機会が増え、この研修会に参加しました。とてもよい学びになりました。(今までこのような研修会に参加することがなかったので…)さっそく、来週から困っている担任の先生方にお伝えし、協力していきたいと思います。
- 障害だからしょうがないとあきらめず、障害の特性を理解して、自立に向けた課題を明確にすることがよく分かりました。また、障害のある子どもたちは私たちの延長にあり、同じ弱さを抱えた人間であり、そのように見方を変えることが大切だと思いました。グループワークでは、コーディネーターをされている方のお話がとても分かりやすく、現場での対応の様子がよく分かりました。
- 長江先生のご講義が、実践の場で働いている私たちと等身大で話してくださった為、自分に置き換えてお話を聞くことができました。コミットメントはよく使いますが、部分的に丸をつけ、99%しかられている子たちを救うお気持ち、まねさせていただきたいと思います。演習も嬉しいですが、1回2回と参加させていただき、講義の時間がもう少しあれば…もっと聞きたい!と思いました。
- 長江先生の“子どもの良いところをさがす”、“良いところを最大限認めてあげる”というあたたかい指導観はとても素敵だと思いました。現場にいと分かっていても、ついつい忘れてしまい指摘することが多くなってしまうので、どんな場面においても“良いところを認めてあげる”ことは忘れずに子どもと接していきたいと改めて思いました。演習では他校種や様々な立場の方々と協議ができて多角的、多面的に考えることができました。

(8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて ※複数回参加した方対象

活かせた：11名

- 合理的配慮について、同僚に上手く説明することができ、講義で学んだことを汎化させることができた。
- 「スキルを教えるから知識を教える」「社会的認証欲求が育っていない」等、参考にしながら支援した。
- 心理的に子どもたちに対する見方や対応の仕方に少しゆとりがでるのかな…と、言葉がけなど配慮するようになりました。
- 就職に必要なことを踏まえて、今できることを考えて、保護者面談をすることができた。

〈講義〉(85分)

1. 特別な支援が必要な子どもたちとは

- 知的障害や発達障害の子どもたちが困っていること。
 - ・文字を読んだり書いたりすること／言葉でコミュニケーションをすること等である。
- 学習障害(LD)／注意欠陥多動性障害(ADHD)／自閉症スペクトラム障害(ASD)
 - ・人間には、得意な部分と弱い部分があり、みんながその弱い部分を抱えながら生きている存在。私たちは弱い部分について社会生活を過ごすうえで、問題にならないよう補ったり隠したりしながら生きている(社会性)。つまり、弱いところが顕著で補ったり隠したりすることができないと、それが生活上の問題行動とみなされる。→障害のある子どもたちも私たちと同じ弱さを抱えた同じ人間と捉えることができる。
- 障害は治るものなのか？
 - ・成長のプロセスは緩やかかもしれないが、障害の有無に関わらず、子どもは教育により必ず成長する。
 - ・適切な教育を適切な時期に受けていなければ、「二次的な障害」を引き起こすことがある。少なくとも10年後を見据えて、社会的な自立を目指した指導が期待される。



2. 障害の特性を理解する

- 自閉症の行動特徴…①常同行動・こだわり②シングルフォーカス③スケジュールにこだわる④聴覚認知より視覚認知優位⑤見えないものを認知することが苦手⑥曖昧な表現の言葉の理解が苦手⑦刺激に敏感で、嫌悪感をもつこともある⑧他者とのコミュニケーションをとることが苦手。
- 「心の理論」—他者感情が理解できるか? 「サリーとアンの課題」通常の発達では3歳から5歳までで通過する課題とされるが、自閉症の子どもたちには難しい。

3. 支援の実際—どのように支援するか—

〈演習〉グループ協議(50分)

【いいところを生かして課題を解決するシート】を用い、小学校事例・中学校事例から①活かせる能力は何か? ②配慮が必要なところはなにか? ③どのような指導をするか? に焦点をあててグループで協議を行った。

- 実態把握(アセスメント)…その子の実態を把握し、どのような指導をすることで成長が促されるか、支援のポイントは何かを考える。
- 誰がどこで指導するか…通常の学級で支援員がサポートに入る／通常の学級で支援員が教材を提供、伝達や表出を支援／支援員が別の場で指導する等。

4. 「障害」を支援するとは

- 発達の状況と発達の特性を理解する。自立に向けての支援が必要となる。
- 合理的配慮の視点を忘れてはならない。合理的配慮の視点を生かして、一人ひとりの児童生徒のニーズに応じた教育の実践を!

《第3回》 二次障害への対応

- (1) 開催日時 平成29年7月29日(土) 14:00~16:30
(2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
(3) 講師 大正大学心理社会学部臨床心理学科 教授 玉井 邦夫 先生
(4) 内容 ひきこもりやゲーム依存、抑うつ症状等の二次障害のある児童生徒に対する適切な指導や支援の方法を身に付ける。

(5) 参加者 32名

正規採用教員：10名(管理職：1名 特別支援学級等：5名 その他：4名)

臨時的任用教員：4名 さわやか相談員：5名 スクールアシスタント：7名

非常勤講師(GS)：1名 学校地域連携コーディネーター：1名

キャリアカウンセラー：1名 大学院生：2名 教育委員会指導主事：1名

(6) 参加者の評価

①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。

A 十分理解できた : 20名 B おおむね理解できた : 11名

C あまり理解できなかった : 0名 D 理解できなかった : 0名

②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。

A 積極的に交流できた : 9名 B おおむね交流できた : 13名

C あまり交流できなかった : 8名 D 交流できなかった : 1名

③今回の研修会に参加して、満足度はどの程度でしたか。

A 十分満足できた : 25名 B おおむね満足できた : 6名

C あまり満足できなかった : 0名 D 満足できなかった : 0名

④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。

A 十分意欲が高まった : 23名 B おおむね意欲が高まった : 8名

C あまり意欲が高まらなかった : 0名 D 意欲が高まらなかった : 0名

(7) 参加者の感想(主なもの)

○二次障害とは「他の人との関係性のゆがみから生まれる」

という話は、目からウロコでした。

特別支援教育とは、本人への関わりだけではなく、周りの10人の子どもたちへの関わりも重要だということも納得できる話でした。障害の受容についても、一生続く重いものなのだということがわかりました。もっともっと詳しく聞きたい内容ばかりでした。これからの相談活動を慎重にしなければ、と思いました。

○二次障害への対応というテーマでしたが、特別支援教育や教育相談的なニーズが必要な児童生徒に関わる立場の教職員だけでなく、児童生徒理解(保護者理解にあたっては人間理解)という視点で全ての教職員に求められるスキルであり課題でもあったと感じました。

○保護者の方との関わりは、悩みのタネとしてあったので、勉強になりました。「保護者をどうにか変えようとするのではなく、子どもを成長させて、それが子どもに伝わる」という話が話し合いであり、参考にしようと思いました。できない子に目が向いてしまいますが、できる子への配慮も重要だと分かりました。

○先生が具体例を挙げて説明してくださったので、本当に理解しやすく、また、興味をもって学習することができました。一次障害と二次障害は、本人の認知そのものが引き起こすものであり、切り離して考えることのできないものであるということが理解できました。特に図解で教えてくださった「学級集団」については、大変勉強になりました。ありがとうございました。

○あっという間の3時間で、非常に興味深かったです。障害を受容するプロセスや保護者の特徴は何人もの児童や保護者が頭に浮かび、後半の学級集団のお話でとても勉強になりました。日頃ぼんやりと思っていたことを分かりやすく説明していただけたように思いました。

(8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。



- 同僚への助言やアドバイス等。
- 先日聞いた内容を周りに広めた。
- 実習にて ADHD の子の良いところを見て、褒めてから指導に入った。いつもより話を聞いてくれているようだった。

〈講義〉(85分)

1. 特性的障害と関係的障害

- 二次障害は【特性的障害】と【関係的障害】の二つが作用して生じる。どちらか一つだけではなく、二つの障害について理解していくことが大切となる。
- 認知的活動
 - ・認知的活動とは、日常生活の中で生じる場面に応じて問題解決のために機能する活動、今の現状を解決するために仮説と検証を繰り返す一連の流れ。
 - ・すべての認知活動は、欲求の存在が前提にあり、何らかの欲求の解消を伴うもの。知的障害、発達障害では、日常的・慢性的な欲求不満の状態が体験されていると考えることができる。生活場面において、一つ一つの体験で「したい」のに「できない」というストレスを抱えている可能性が高い。
 - ・こうした体験は、少しずつ「欲求の持ち方」そのものに影響を与える。
 - ・一次の特性をもった状態で、二次の障害が出るため、一次の解消がないと二次への介入をしても意味が薄れてしまう。



2. 障害受容・子ども受容…事例を基に、認知機能の特性について理解した。

- 9歳
 - ・抽象的概念の獲得期。[友だちのいやがっていることはやめようね]の指摘を受けるが理解が難しい。
- 小学校中学年
 - ・発達障害のある子を含めてクラス全員で楽しく学校生活を過ごすためにはどうするか、というソーシャルスキルの要素を入れた学級運営と、発達障害を持つ子の支援のみを考えた学級運営の違い。
- 小学校高学年
 - ・対人関係評価の多層性に困難を抱える時期。
- 中学校・高校
 - ・高機能とされる発達障害の子どもであっても、対人面・学習面の課題は大きい。
- 成人
 - ・高度対人状況のコミュニケーションの難しさがある。
- 本人が自分自身の特性を理解し、周囲に助けを求められることが大切。

3. 「受容」の土台を築く

- 本人が支援を受け入れられない背景には、保護者の理解が影響している場合が多い。
- 障害の告知は「喪失」であると受け止められることが多い。
 - ・理想としたわが子のイメージを喪失する体験となる。しかし、障害は「喪失」ではない。
- 子どもと良い関係にある支援者の言葉は、抵抗感をもつ保護者にも受け入れやすい。子どもの成長の共有が、保護者の気持ちも少しずつ変化する要因と考えられる。
- 「受容」とは波状に続く終わりのない課題である。

〈演習〉グループ協議(50分)

【学校現場で二次障害がでたと思われたケース】と【それまでのプロセス】【どのようにサポートしたか】について子どもと保護者、対応職員についてグループで協議を行った。

4. 学級集団

- ・二次障害への対応を考えるうえで、学級にいる「もちこたえ群」に対する担任の肯定的な評価を適宜伝えることは大切。発達障害のある子の良いモデルとなる存在。
- ・特別支援教育は、周囲がその子を受け入れ、互いに良いところを受け入れ、理解し合うことも大切。

《第4回》 ユニバーサルデザインを生かした学級経営・授業づくり

- (1) 開催日時 平成29年8月26日(土) 14:00～16:30
(2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
(3) 講師 八潮市立八條小学校 主幹教諭 柳橋 知佳子 先生
(4) 内容 発達障害等のある児童生徒の学級経営、授業づくり等について、ユニバーサルデザインを生かした効果的な指導や支援の方法を身に付ける。

(5) 参加者 25名

正規採用教員：11名

(特別支援学級等：4名 その他：7名)

臨時的任用教員：3名 さわやか相談員：2名

スクールアシスタント：1名

学校地域連携コーディネーター：2名

キャリアカウンセラー：1名 大学院生：3名

教育委員会指導主事：2名



(6) 参加者の評価

①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。

- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 十分理解できた | : 15名 | B おおむね理解できた | : 7名 |
| C あまり理解できなかった | : 0名 | D 理解できなかった | : 0名 |

②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。

- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 積極的に交流できた | : 10名 | B おおむね交流できた | : 9名 |
| C あまり交流できなかった | : 1名 | D 交流できなかった | : 0名 |

③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。

- | | | | |
|-------------|-------|-----------|------|
| A 十分学べた | : 20名 | B おおむね学べた | : 2名 |
| C あまり学べなかった | : 0名 | D 学べなかった | : 0名 |

④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。

- | | | | |
|-----------------|-------|---------------|------|
| A 十分意欲が高まった | : 17名 | B おおむね意欲が高まった | : 4名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 0名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |

(7) 参加者の感想(主なもの)

- 柳橋先生のご講義の一つ一つがたいへん参考になるものばかりでした。子どもたちが「楽しい!」と思える学級・授業づくりをしていくには、子どもたちのアセスメントをしっかりと行い、理解を深めていくことなんだと改めて感じました。子どもたちの笑顔が増えていくように、一緒に考えていきます!
- 今日は柳橋先生の実践に基づいたユニバーサルデザインを生かした授業づくり、学級経営についてたくさんこのことを学ばせていただき、ありがとうございました。先生がクラスに在籍する様々な児童の困難な面を支援するだけでなく、その子のよさをいかに発揮できるかということも考えながら、お互いの違いや良さを認め合えるクラスづくりをされている事にも感動し、自分の学級経営や授業実践にいかしていきたいと強く感じました。本当に勉強になりました。
- 柳橋先生の実践はどれも素晴らしいものばかりで、私も二学期からやってみたいと思うものがたくさんありました。ただ、一つ一つの実践が根っこ部分では繋がっていて、あたたかな関わり合い、肯定的な関係性があるこそだと思いました。
- 適切な対応や指導を受けられる環境にいた子どもが成長し、大学での就職活動で困難からカウンセリングに支援を求めるとき、カウンセラーのアセスメント能力を求められることを再認識しました。学級も組織も「情報・感情・目的・目標」の共有を実践し、情熱とPDCAの継続が成長の要なのですね。
- データに基づいた説得力のあるお話、子どもが自分らしく過ごせるための工夫の数々、どれもこれもとても素晴らしくて夢のような時間でした。まずは、子どものいいところをたくさん

んみつけて素敵になること、これが一番大事なんだと感じました。子どもを理解し、その子たちが輝くために、自ら学び、実践し改善する、自分も少しずつできることから始めてみようと思いました。

(8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。

- 発達障害への理解が深まり、声かけなども適切にできるようになったと思う。
- クラスの中で対応するスキルが身についた。
- 職員の研修を行う際に参考にした。

〈講義〉(85分)

1. ユニバーサルデザインについて

- ユニバーサルデザインとは…特別な支援を要する児童には「ないと困る支援」であり、どの児童にも「あると便利で・役に立つ支援」である。
- 子どもを支える「みんなが分かったと思える授業」「リソース(個別支援)」「安心できる場所としてのクラス」。

2. 支援のポイント6項目～授業の検証から～

- ①支持・説明の工夫②学習活動のユニット化③学習時差の対応④視覚化⑤動作化⑥称賛の工夫とその機会を増やす
- クラスづくりで大切にしたいこと→静けさを大切にするクラス／聞いてもらえる心地よさを体感しながら話を聞く大切さを全員が実感できるクラス／聞く姿勢ができていくクラス

3. 支援体制づくり

- 保護者との連携、校内連携や他職種連携と共に、「子どもの思いに寄り添う信頼関係」は支援体制づくりの重要な基盤。
- 「温かな受け止め」と「共に育つ学級の雰囲気」のあるクラス。
- 学級運営において大切にしたいポイント→子どもたちそれぞれにとって必要なことはなんだろう？この手立ては、この子たちに適しているのだろうか？子どもたちが「今日もできた!」「楽しかった」と思ってくれているだろうか？

〈演習〉グループ協議(50分)

4. 質疑応答

- 新年度スタート時のユニバーサルデザインを生かした授業づくりへ向けた種まき。
 - ・みんなの良いところをたくさん見つけたいと伝える。
 - ・同時に、決して許せない3つのルール【命を脅かす行為】【心を踏みにじる行為】【未来を脅かす行為】について伝える。
- 個別対応に対する子どもの反応についての対応。
 - ・みんな顔が違うように、みんなが違う。
 - ・計算機を使用する際にも、使いたい子が使って良いと思っている。
 - ・困っている子に対して担任は助けてくれる存在であり、自分が困っているときも助けてくれる存在である、という信頼関係。
- 校内での支援の共有について。
 - ・校内支援委員会で、事例検討を実施。状態の確認と手立ての検討を行う。そして、次回の校内委員会で手立てを行った結果について報告する。
 - ・大切なのは「大変だが、じゃあこうしてみよう」と改善策についての話が挙がること。



《第5回》 発達障害等のある児童生徒のトラブル・問題行動等への対処

- (1) 開催日時 平成29年9月30日(土) 14:00～16:30
(2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
(3) 講師 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 櫻井 康博 先生
(4) 内容 児童生徒のトラブル・問題行動等を発達障害の観点からとらえて、その解消や未然防止のための指導・支援の方法を身に付ける。

(5) 参加者 25名

正規採用教員：11名(特別支援学級等：5名 その他6名) 臨時的任用教員：3名
さわやか相談員：2名 スクールアシスタント：3名
学校地域連携コーディネーター：1名 キャリアカウンセラー：1名
GS 非常勤講師：2名 大学院生：1名 教育委員会指導主事：1名

(6) 参加者の評価

①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。

A 十分理解できた : 15名 B おおむね理解できた : 8名
C あまり理解できなかった : 0名 D 理解できなかった : 0名

②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。

A 積極的に交流できた : 10名 B おおむね交流できた : 10名
C あまり交流できなかった : 1名 D 交流できなかった : 0名

③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。

A 十分学べた : 12名 B おおむね学べた : 11名
C あまり学べなかった : 0名 D 学べなかった : 0名

④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。

A 十分意欲が高まった : 15名 B おおむね意欲が高まった : 8名
C あまり意欲が高まらなかった : 0名 D 意欲が高まらなかった : 0名

(7) 参加者の感想(主なもの)

○障害の理解について丁寧に教えてくださり、先生の体験も交えてとても分かりやすかったです。本校に発達障害の児童が教育相談に来ていますが、保護者、児童に対しての関わり方も参考になりました。演習の場では、他校種の先生方と話ができたり、考えを知ることができたりして発達段階に応じた対応も知ることができました。

○気になる子どもがいたら、まずは積極的に関わりに行く中で、その子の特性を見つけていきたいと思えます。また、子どもたちから何かしらの行動が出てくる前に、その行動が少なくなるような工夫をしていきたいと思いました。

○できないことへの理解、探ることで答えが見つかっていくことがあるのかなと思いました。環境によって子どもは大きく変わるということを、通常の子どもたちが学年があがっていくことで実感しているので、大切にしていきたいと思いました。今回も引き出しがまた一つ増やせたと思っています。

○子どもたちを笑顔にできる存在として、少しでも役割を果たしていけるようになりたいと思いました。様々な考え方に触れ、大変勉強になりました。

○OJTによる教員の授業力向上を研究しております。通常学級の中でも困り感を持っている生徒は何名か見られます。これまでは、改善させるような指導をしてきましたが、そうではなく、子どもをしっかりと理解し、よさを認める指導をしていくことで、生徒との人間関係もよくなり生徒の力も伸ばせると感じました。『五感に働きかける』というお話が心に残りました。



(8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。

- 保護者面談や不登校児童生徒との関わりの中で実践した。
- 同僚へのアドバイスをを行った。
- 発表ボードや〇〇記念システムなどユニバーサルデザインの教室や授業で実践した。

〈講義〉（８５分）

I. トラブル・問題行動⇒『本人が困っていること』という理解。

1. 障害とは

- 障害による【個人因子】＋環境との相互関係による【環境因子】⇒両者を総合的に理解していく。
- 一人ひとりの活動の目的は異なる。支援や指導を実施することで、障害による活動の難しさは軽減される。

2. 発達障害児について

- 平成２４年の文部科学省調査において、学習や行動面での困難を示す児童生徒の割合は１クラスあたり約３名という報告。
- 子どもに働きかける感覚は５つ『五感』…子どもの感覚の特徴に合わせて接する。
 - ・障害とは、環境との相互作用で生じる。色のグラデーションのように捉えることがポイントとなる。
 - ・環境によってそのグラデーションが成長・変化していく可能性がある。

3. 方向性

①早期発見

- ・クラスに３人は特性をもつ子が在籍しているという前提で、特性理解のアンテナを常にもつ。
- ・一斉指導に限界が出てきた際には、本人がやりたいと思う活動を大切にする。
- ・特性の凸凹を理解し、特性に応じた対応に向けて、学校生活の細やかな観察が重要である。

④ プライドの尊重

- ・支援を受けることに対して嫌がる気持ちを理解する。嫌がった際の対応…本人と一緒に考えていける関係性。一緒にあなたのことを考えていきたい、というメッセージを伝える。

⑤ 自己理解を促し自己コントロールを図る・自分で自分の生活を守る

- ・将来へ向けて生きる力を伸ばす。自分の苦手を知って、どうやったら補えるか一緒に考える。
- ・基本的には友達と関わることが好きな子が多い。友達と仲よく遊べるように、イライラした時の対処法について本人と共有する。

4. 行動の理解

○一次（的）障害と二次（的）障害

- ・特性による行動は脳機能が原因であるため、自己コントロールは難しいとされる。
- ・先生が良かれと思って行う支援・指導が、発達障害の子にとって良くない影響になる場合もある。

○対人関係の特徴…人への関心はあるが、コミュニケーションに難しさをもつ。

○未学習…好きなことへの高い集中力を持つ一方で、新しい体験への苦手さをもつ場合もある。

○言葉掛けの工夫…支援・指導の際には、簡潔な言葉で伝えることが効果的である。

〈演習〉ペア協議（５０分）

３つの事例を想定し、『どのように子どもを理解し、支援・指導するか』をテーマに検討した。

- 支援する際に、教員がもつ支援の『引き出し（選択肢）』が多いほど良い。限られた『引き出し』はそこに当てはめようとして対応が難しくなる。

- 『引き出し』の場所を教えてくれたり、増やしてくれたたりするのは発達障害の子どもたち。

5. ポイント

- 子どもを積極的にかまう…深くその子を理解しようと観察し、特徴を捉えるために効果的。
- 特別支援学級や通級指導教室の活用や、特別支援教育コーディネーターの存在の重要性。
- さいたま市特別支援ネットワーク連携協議会の活用。
- 一人ひとりとどう関わるのが良いか、特性に応じてその子への可愛がり方を模索していく。

《第6回》 発達障害等のある児童生徒の進路指導

- (1) 開催日時 平成29年10月28日(土) 14:00～16:30
- (2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 講師 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 若林 上総 先生
- (4) 内容 発達障害等のある児童生徒の進路指導の在り方を理解し、支援の方法を身に付ける。
- (5) 参加者 19名
正規採用教員：11名 さわやか相談員：2名 スクールアシスタント：2名
キャリアカウンセラー：1名 大学院生：2名 教育委員会指導主事：1名
- (6) 参加者の評価
- ①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 十分理解できた | : 10名 | B おおむね理解できた | : 7名 |
| C あまり理解できなかった | : 0名 | D 理解できなかった | : 0名 |
- ②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。
- | | | | |
|---------------|------|-------------|------|
| A 積極的に交流できた | : 9名 | B おおむね交流できた | : 6名 |
| C あまり交流できなかった | : 1名 | D 交流できなかった | : 0名 |
- ③今回の研修に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。
- | | | | |
|-------------|-------|-----------|------|
| A 十分学べた | : 10名 | B おおむね学べた | : 7名 |
| C あまり学べなかった | : 0名 | D 学べなかった | : 0名 |
- ④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。
- | | | | |
|-----------------|-------|---------------|------|
| A 十分意欲が高まった | : 10名 | B おおむね意欲が高まった | : 6名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 0名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |
- (7) 参加者の感想(主なもの)
- 教師の想い、保護者の想い、本人の想いのすり合わせが大切なのだと改めて実感しました。本人の特性や長所を理解してそこを人生で伸ばしていける、豊かな人生を送っていける支援を今後も考えていきたいです。
- 早い段階で自分の特性を知ること、進路の選択肢を知ることが大切だと分かりました。早い段階で次の進路への準備が必要なのは、発達障害があってもなくても一緒かもしれないと思いました。
- 担任は多様なニーズをもつ子どもたちに対して、より多くの情報(選択肢)を与えられるよう知識や情報を得ていること、保護者の思いに寄り添う姿勢(子ども自身と希望のギャップがある場合のフォローも含め)、子どもたちがなるべく自己決定できるよう計画的に進路学習を取り入れていくことが大切であると実感しました。
- 進路指導において、自己決定をするための就労支援が大切であることを学んだ。また「保護者の想い」を大切にし、丁寧に想いを拾っていくことの必要性を感じた。本人と保護者にどのように自己決定を促していくか、現実を知ったうえで本人の良いところ、課題と向き合い、よりよい選択を自分で行っていくことが大事だと思った。
- 進路指導において保護者の気持ちに寄り添うことはもちろん、先送りする場合はその理由もはっきり言葉にして伝えるとともに、情報として先の見通しの厳しさも伝えるというお話が印象に残りました。改めて進路指導の重要性を感じました。また、大学入試には配慮がいろいろあるのに高校入試ではあまりない(活用されていない)点が気になりました。
- (8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。
- 生徒の学級での環境づくりについて先生から相談を受けた際に、資料を参考に渡してお話ししながらお手伝いをすることができた。



- 学級経営のあり方を深く考えるようになりました。
- 本人への声がけの時に注意するようにしています。

〈講義〉（70分）

1. 進路指導とは何か…「生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識をもち、自らの意志と責任で進路を選択決定する能力・態度を身に付けることができるよう、指導・援助すること（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究者会議，2004）」
 - 発達障害等のある児童生徒についても同様に行われる。
2. キャリア教育…キャリア発達を促す教育である。
 - 「キャリア発達は、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」とされる。普通教育、専門教育を問わず様々な教育活動の中で実施される。
 - ・一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育成。
3. 高校進学の手導
 - 保護者への情報提供
 - ・進路指導で大切なことの一つとして、保護者への心理的支援が挙げられる。段階的には対象児の得意不得意に応じた現実的な情報提供も必要。
 - 本人と自己理解を深める
 - ・通級での指導において、『自分の得意な面や興味・関心、苦手な面の理解を促すこと』や、『自己理解を深め、進路を自己選択、自己決定していけるようにすること』が大切。
4. 大学進学の手導…大学支援センターの機能…富山大学学生支援センター アクセシビリティ
 - ・コミュニケーション支援室の事例について。
 - 試験の方法と必要なアコモデーション
 - ・拡大文字や音声出題、時間延長等の対応がセンター入試でも取り入れられるようになった。
 - 発達障害のある学生に対する大学での授業支援が充実。
 - ・大学での授業支援充実という情報を高校の教員が把握し、生徒の現状を理解しながら、生徒自身も自己理解を深め、本人の希望に沿ったサポートに繋がることは大切。
5. 発達障害のある生徒の就労支援
 - 移行の計画 (Individual Transition Plan) …個別支援計画 (IEP: Individual Education Plan) が生徒の教育プログラムの要約であるのに対して、ITP はプログラムでのニーズ、将来についてのおおよその目標、短期目標や目標達成のための活動。
 - キャリア・パスポート（仮称）の活用
 - ・小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを振り返ることが可能。

〈演習〉グループ協議（50分）

『進路指導に必要なことは何か』についてグループで検討した。

- 児童生徒自身が自分の将来に対して意思をもって、自己理解を深めながら決められること。
- 関わる大人が必要となる知識を知っておくこと。選択肢をもっていること。

6. まとめ

- 発達障害の有無に関わらず、保護者がこれまで抱えてきた想いや経験を大切に、一つでも多く共有できるとよい。
- 答えを出すのは本人や保護者であり、そのプロセスにある葛藤に寄り添いながら、一方では現実的な情報を提示していくこと、そのバランスが大切。



《第7回》二次障害としての不登校への対応

- (1) 開催日時 平成29年11月11日(土) 14:00~16:30
- (2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 講師 NPO法人 リソースセンターONE 代表 上原 芳枝 先生
- (4) 内容 二次障害のある児童生徒の不登校について理解し、適切な指導や支援の方法を身に付ける。
- (5) 参加者 16名
正規採用教員：4名 臨時的任用教員：1名 さわやか相談員：3名 養護教諭：1名
スクールアシスタント：1名 大学院生：4名 学校地域連携コーディネーター：1名
教育委員会指導主事：1名
- (6) 参加者の評価
- ①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。
- | | | | |
|---------------|------|-------------|------|
| A 十分理解できた | : 5名 | B おおむね理解できた | : 8名 |
| C あまり理解できなかった | : 1名 | D 理解できなかった | : 0名 |
- ②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 積極的に交流できた | : 10名 | B おおむね交流できた | : 4名 |
| C あまり交流できなかった | : 0名 | D 交流できなかった | : 0名 |
- ③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。
- | | | | |
|-------------|------|-----------|------|
| A 十分学べた | : 7名 | B おおむね学べた | : 7名 |
| C あまり学べなかった | : 0名 | D 学べなかった | : 0名 |
- ④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。
- | | | | |
|-----------------|------|---------------|------|
| A 十分意欲が高まった | : 9名 | B おおむね意欲が高まった | : 4名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 1名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |
- (7) 参加者の感想(主なもの)
- NGの支援方法を教えていただき、これまで自分が当たり前のように行ってきた支援もあったので驚きました。「設定」「ラグ」「カプセル」の3観点で一人一人の子どもに寄り添った支援をしていきたいと思います。
- 具体的な事例をもとに話し合いができたので、とても参考になりました。
- 実例を踏まえて話し合うことができ、また、それに対する回答やアドバイスがいただけたのでとても参考になりました。
- 普段は障害児の支援方法を学んでいて、○○は大切だと言われることが、今回のケースではNGだったので、実態に応じた支援をしっかりと見極めて行っていかなければならないと痛感しました。
- 不登校生徒と日々関わっていますが「不登校は脳機能の問題」であり、「環境刺激の処理困難による狭量オーバー」という視点には、目から鱗でした。NG対応ばかりしている日々を深く反省しました。しかし、日々の活動に実践するにはもっともっと詳しく伺わないといけないと思いました。きっかけは十二分にいただいたので、それを今後どう生かすかがとても難しいと感じました。
- 上原先生のお話はいつも頭をリセットしてくださいます。脳機能の視点から考えることをもとに支援をしている身としては恐れ多いことですが、こういう先生に学校のコンサルテーションをお願いしたいと思っています。
- (8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。
- 面談や先生方の話を聞く際に情報提供をした。
- 声かけする場合としない場合など。



〈講義〉（70分）

1. 不登校とは

- 不登校の理由：「心の問題ではない」という前提…一見、さぼっているように見えたり、甘えているように見えたりする不登校。大人から見て気になる子である本人も、その渦中にいるときは、その事情が自分でもよく分からないことが多い。
- 従来の対応（注意・励まし・繰り返しなど）による負の遺産。
理にかなった支援とは、脳機能の視点で要因を考えていく支援であり、従来の子ども観・教育観の転換をすることが大切となる。

2. 理にかなった支援の概要

- 「要因」と整合性のある「支援の手立て」が子どものもつ本来の力を伸ばす。
- 気になる言動を細やかに観察し、具体的なエピソードを1項目ずつ挙げていくことから支援の立案が始まる。気になる言動から「要因」を想定し、実際の支援場面を具体的にイメージしながら、短期目標や、支援の選択肢の中でどれが支援として適切なものかを選定。支援後の評価、次期支援に繋げていくことも重要。

3. 不登校は二次障害だろうか？⇒不登校リスクの高い脳機能要因から引き起こされる現象。

- 環境刺激の処理困難としての”蓄積型”…学校は集団生活の場や、集団統制のための圧がかりやすい、という点で対象児にとって情報の多い環境であり、たくさんの情報を処理することが大きな負担となる場合がある。
- 環境刺激の処理困難 ”爆風” 場面…対象児にとっての”爆風”とは⇒自由遊びや音楽・図工・英語などの自由度の高い場面。
- 情報処理困難への方略：環境刺激を下げる。
 - ①空間設定…座席によって教室における情報量の調整。
 - ②時間・場所のラグ…手伝いを頼むなど、集団から離れることが可能となる選択肢の提示。
 - ③意識のカプセル…集団の中で、物・動きなどに意識を集中させることで、環境刺激を遮断。

4. まとめ

- 不登校のリスクが高いと思われるケースの特徴：不登校をもたらす要因は様々考えられるが、集団生活や圧への苦手さ、対人関係におけるイメージする力の苦手さをもつケースがある。学習に関する脳機能の要因による不登校も存在する。ストレス耐性の課題の側面⇒ストレスを感じにくい（鈍感）ストレスを感じやすい（敏感）。
- 環境への対処が提供されることによって、不登校リスクを持つ子どもが学習の機会・教育の機会を得られることに繋がる。

〈演習〉グループ協議（50分）

『各学校の不登校児童生徒の事例』をもとに、「要因」と「支援の手立て」について、①設定、②時間と場所のラグ、③意識のカプセルの視点をもってグループで検討した。

5. まとめ

- 不登校になったらゆっくり休ませることが大事である。今はノックアウト状態である。
- 保護者と対立することはよくないので、意向を尊重するが状況による。
- 学校はハードルを下げるのが難しいが、いったん下げてあげ、みんなが応援していれば子どもは必ず前に進む。
- 意識のカプセルとして、目立たないものなどをポケットにもたせておくこともある。
- 子どもは一人であることが好きなのではない。授業が好きなのである。
- 自治体が不登校児童生徒の受け皿をしっかり準備しておくことが必要である。



《第8回》保護者の理解と支援

(1) 開催日時 平成29年12月16日(土) 14:00~16:30

(2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

(3) 講師 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 尾崎 啓子 先生

(4) 内容 発達障害等のある児童生徒の保護者への支援の方法を身に付ける。

(5) 参加者 24名

正規採用教員：6名 養護教諭：1名 臨時的任用教員：4名 さわやか相談員：4名

スクールアシスタント：3名 学校地域連携コーディネーター：2名 大学院生：3名

大学生：1名

(6) 参加者の評価

①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。

A 十分理解できた : 13名 B おおむね理解できた : 9名

C あまり理解できなかった : 0名 D 理解できなかった : 0名

②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。

A 積極的に交流できた : 10名 B おおむね交流できた : 11名

C あまり交流できなかった : 0名 D 交流できなかった : 0名

③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。

A 十分学べた : 14名 B おおむね学べた : 8名

C あまり学べなかった : 0名 D 学べなかった : 0名

④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。

A 十分意欲が高まった : 15名 B おおむね意欲が高まった : 7名

C あまり意欲が高まらなかった : 0名 D 意欲が高まらなかった : 0名

(7) 参加者の感想(主なもの)

○事例を出させていただき、大変参考になりました。手詰まり感のあるケースでしたが保護者のタイプも整理でき、グループの皆さんからの意見もいろいろ聞くことができてありがたかったです。尾崎先生のまとめとも合わせて、今後の活動にぜひ活かしていきたいと思います。人前で話すのがとても苦手ですが、「事例を出すと得をする」と以前言われたことを思い出して、やってみてよかったです。

○自分の勤める特別支援学校の児童と保護者について出させていただきました。グループの方々からいろいろな意見をいただくことができて参考になりました。自校に持ち帰り、担任に伝え、保護者との関わりの中で活かしていきたいです。

○障害にとらわれすぎず、本人の特性としてとらえ、よさを認めること、好きなことは何かしっかりと目を向けることが大切だということを学びました。保護者とともにそのことを共通理解のもと、子どもをはぐくんでいきます。

○今回の保護者の理解と支援はとても参考になりました。面談ではついつい助言をしなければと考えてしまうのですが、時には保護者の話も傾聴して気持ちを軽くしてあげることでよいのだと分かったことが収穫でした。

○後半の事例研究では、さわやか相談員や養護教諭、コーディネーター等の様々な立場の方から意見を聞くことができ、とてもよい機会になりました。

(8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。

○発達障害のある生徒の対応の仕方を具体的に担任に助言しました。

○同僚の先生方に資料を紹介し、学ぶ機会を作ることができました。

○学級の中では声かけをしたり、しなかったりしました。学校外では不登校の親へ進路について話しました。



〈講義〉（70分）

1. 保護者の理解

- 「困っている子ども・保護者」の背景要因を社会状況を含めて、複数の可能性を考えながら推測する。
- 困っている保護者…発達障害について気が付きつつあるケースもあるが、保護者は子どもが成長していくことへの期待を持っている。支援者はその前向きな期待に寄り添いながら、具体的な対応方法について一緒に考えていくことも大切となる場合がある。
- 困っているように見えない保護者…“障害”の面のみが目が向き、子どもがもつ可能性や良い面に目を向けることが難しいケースもある（例：外在化⇒知性化⇒合理化）。向き合うことが難しい内容（例：発達障害等）から、保護者がどのように自分自身を守っているのかについて推測する。自分を守ることは大切なので、防衛については尊重しつつ、適切な対応方法を考える。

2. 保護者への支援

- 保護者との信頼関係づくり…子どもの成長、課題などを共有する。子どもの課題のみが報告されることのないように配慮する。子どもの特徴を理解し、【解説者】ではなく、【共に子どもの成長を見守る人】として保護者と協働する。
- 保護者の話に耳を傾ける
 - ・「家ではできています」と保護者から言われた場合⇒配慮が必要な子どもについて、彼らがどのような状況下であれば適切な行動が促されるのか、保護者のお話をよく聞く。適切な行動の機会が増えるように具体的な環境設定を行うことができるチャンスである。
 - ・子どもへの丁寧な支援を行う際に、適宜保護者の子どもについての受け止め、その心情を細やかに配慮、確認することが大切。丁寧な支援が保護者の直面化となる場合もある。
- 理不尽な要求をする保護者への対応…チーム学校としての対応。一人で抱え込まず、複数職員での初期対応を大切にする。理不尽な要求については、「要望」とその背景にある「本心」を丁寧に聞き取る。

3. 専門家への相談を勧める場合の配慮

- まずは保護者の理解を促すことと、専門家への相談によってどんなメリット・デメリットがあるのか、何が明らかになりどのような対応が可能になるか、あらゆる可能性や対応策を丁寧に話し合うことが大切。検査を行った場合は、得られた結果を、子どもが生活する場所で具体的に活かしていく。
- 「苦手なことも自分の個性」という本人の強みや自信を育て、支える支援となるように留意する。

4. まとめ—保護者とのつながりにおける留意点—

- 子どもの成長には保護者と学校の協働が大切である。
- 支援者自身の感情労働の大変さを理解し、共感疲労に陥らないよう自分自身のケアを行うことを忘れずに。

〈演習〉グループ協議（60分）

『参加者の抱えている事例をもとに、①困っている保護者、②困っているように見えない保護者、③困らせる保護者に分類した後、その対応と留意点』についてグループで検討した。

5. まとめ

- ケース会議に保護者を含めるのもよい。家の状況と学校の現状を丁寧に話し合い、将来像をもつ。
- 大人は変わらないが、子どもは変わる。希望や期待がもてる。遠回りでもそれが近道になる。
- 保護者を大事に思っていることが伝わるアプローチが大切である。



《第9回》教育相談の方法～アサーションを中心に～

- (1) 開催日時 平成30年1月27日(土) 14:00～16:30
- (2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
- (3) 講師 埼玉大学教育学部心理・教育実践学講座 教授 澤崎 俊之 先生
- (4) 内容 発達障害等のある児童生徒に対する教育相談の実践的な対応について、アサーションを中心に身に付ける。
- (5) 参加者 19名
正規採用教員：9名 さわやか相談員：3名 スクールアシスタント：3名
キャリアカウンセラー：1名 大学院生：2名 教育委員会指導主事：1名
- (6) 参加者の評価
- ①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 十分理解できた | : 14名 | B おおむね理解できた | : 4名 |
| C あまり理解できなかった | : 0名 | D 理解できなかった | : 0名 |
- ②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。
- | | | | |
|---------------|-------|-------------|------|
| A 積極的に交流できた | : 13名 | B おおむね交流できた | : 5名 |
| C あまり交流できなかった | : 0名 | D 交流できなかった | : 0名 |
- ③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。
- | | | | |
|-------------|-------|-----------|------|
| A 十分学べた | : 14名 | B おおむね学べた | : 3名 |
| C あまり学べなかった | : 1名 | D 学べなかった | : 0名 |
- ④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。
- | | | | |
|-----------------|-------|---------------|------|
| A 十分意欲が高まった | : 16名 | B おおむね意欲が高まった | : 2名 |
| C あまり意欲が高まらなかった | : 0名 | D 意欲が高まらなかった | : 0名 |
- (7) 参加者の感想(主なもの)
- アサーションについて「自分の心にありのままに」の視点で、自己把握、表現、聴く姿勢のプロセスがあることを学びました。様々な演習を経験することで、相手の気持ちを理解したり、自分の気持ちを伝えることの大切さが分かったり、自分自身がアサーティブになり「聞く」ことを学んだりしました。
- 演習を通して実践に活かそうです。3つのワークを自分の引き出しにでき、いつでも使えると思います。嬉しい。「相手の立場を考え動く」ということは意味深いと思いました。
- 自分の正直な気持ちを感じ取る、相手を知り、相手の気持ちを考え思いやること、そのうえで良い関係づくりのため、よりよい課題解決のためのアサーティブなコミュニケーションが実現できるようにしていきたいと思いました。
- 他者と共有することの楽しさを改めて感じました。相手とどのような関係を作り、どうしていきたいのか、まずは主体的に考えていくこと、コンセンサスを経て共に生きていくという意思決定も重要と思いました。表現するときに、主語が That/It なのか、I なのか We なのか、検討する意識が大切と知りました。
- (8) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。
活かした：5名

〈講義〉(120分)

適宜ペアワークやグループワークを行った。

1. アサーション(自己表現)とは

- “自分も相手も大切にしたい自己表現”…自分の心に正直になってみる。日々の生活の中で、今のことに精一杯になることが多い。自分の心を確認する時間が少ない。
- 期待と今の心のズレ…正直になってみよう。



○アサーションとソーシャルスキルトレーニングの違い…**アサーション**：自分の気持ちを確かめて感じてみる⇒自分の気持ちをつかまえてそれを相手に伝えてみる⇒結果的に行動を変容させても良い。柔軟な変更可能。／**ソーシャルスキルトレーニング**：実行したい行動は決まっており、実行するためにはどのように伝えようと良いかを考える⇒自分に合った伝え方を探していく。



○アサーションのはじまり…アサーションは 1960 年代のアメリカにおける政治的変革、人権保障の動きから生じた考え方。中国にある恕（じょ）とも近い。近いメッセージを現代に合わせて伝えていけるとも捉えられる。

○アサーティブを獲得するためには…スキルの獲得だけでは本当の意味での理解は難しく、人間観をベースに成り立っているものである。自分の思考傾向を知ることが大切。

2. 教師にとってのアサーション

○子どもの声を聴く存在としての教師…子どもにとって表現することが不十分であっても、教師が代弁できるとよい。

3. 自分の気持ち・相手の気持ちと仲良くなる練習（ペアワーク）

○自分を知り、失敗を怖れない。失敗はするが、前向き、建設的に。

○言語的なアサーションの基本には非言語的なアサーションがある。

4. 課題解決のアサーション

○アサーションスキルは【関係維持】と【課題解決】で異なる。【関係維持】は相手との関係を維持することが目的であるため、話の内容を変更することが可能。一方、【課題解決】では話題を解決することが目的⇒DESC 法と呼ばれる。

○DESC 法…相手と自分の共通点を見付け、自分の気持ちを十分に表現し、提案は簡潔に行う。課題を見付けた人が、共通点を見出すことが大切。そして、相手が YES/NO どちらであっても行えるような選択肢を用意する。

5. まとめとふりかえり

○職場におけるアサーション…自分も相手も大切に作る環境づくり。

○自分の心とは、普段目に見えない。しかし、目に見えないことの中に、自分の本当の想いが溢れているのではないか。アサーションを通して、自分が本当に思っていること、感じていることを見つめていくことによって、職場環境やクラスの雰囲気、子ども同士のコミュニケーションを円滑にすることにもつながる。

6. 質疑応答

○アサーションは教育相談のどのタイミングで活動できるか。

課題へ対応する事前の環境づくりとして、予防的開発的心理教育として有効。何気ない日常生活の中で取り入れられる。

○アサーションの哲学的な背景は何か。

基盤にある考え方はアメリカ人権運動。人として生きるためには自己表現が大切。伝えること、相手を大切にすることが生きる基本となる。



《第10回》チーム体制の構築

- (1) 開催日時 平成30年2月17日(土) 14:00~16:30
(2) 開催場所 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター
(3) 講師 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター 教授 庄司 康生 先生
(4) 内容 学校の課題解決に向けて、学び合う学校における同僚性の構築について理解する。
(5) 参加者 21名
正規採用教員：9名(管理職：2名) さわやか相談員：3名 スクールアシスタント：2名
学校地域連携コーディネーター：2名 大学院生：3名 教育委員会指導主事：2名
(6) 参加者の評価

①今回の研修に参加して、内容の理解はどの程度できましたか。

- A 十分理解できた : 8名 B おおむね理解できた : 8名
C あまり理解できなかった : 2名 D 理解できなかった : 0名

②今回の研修に参加して、他の職種の方と交流できましたか。

- A 積極的に交流できた : 9名 B おおむね交流できた : 8名
C あまり交流できなかった : 2名 D 交流できなかった : 0名

③今回の研修会に参加して、新しい実践方法、考え方、知識を学ぶことができましたか。

- A 十分学べた : 11名 B おおむね学べた : 6名
C あまり学べなかった : 2名 D 学べなかった : 0名

④今回の研修に参加して、ご自身の実践意欲が高まりましたか。

- A 十分意欲が高まった : 10名 B おおむね意欲が高まった : 7名
C あまり意欲が高まらなかった : 1名 D 意欲が高まらなかった : 0名

(8) 参加者の感想(主なもの)

○特別支援教育に携わっています。今日の「学び合い」は、これからの特別支援教育が目指しているものであると強く感じました。「わからないことは恥ずかしいことじゃない」「お互いの違いや良さを認め合い、受け止める力の育成」は私自身が大切にしていることでもあります。(ビデオに出てくる)児童に対してあえて厳しい指導をした場面はとても感動しました。私も子どものことを深く理解し、ジャンプする力を高め、支援していけるよう努力していきたいです。



- 学び合うことは子どもたちの学習スタイルとして必ず話題になり、トライしている取り組みです。今回、ビデオで拝見した先生の指導方法、学びの実践を見ることでどのように子どもたちを育てていったらよいかというスタートラインが分かったような気がしました。
- 「学び」の大切さを具体的に知ることができました。自分もこんな授業を受けてみたい、子どもたちにもっと受けさせたいと強く感じました。今、コミュニケーションが苦手という生徒が増えています。グループワークが嫌で教室へいけない生徒、集団が耐えられない生徒たちも、もっと早い段階で「学び」を体験すれば変わっていたのでしょうか。ゲームやスマホの普及に対抗できる「学び」が全ての小中学校で広がっていくことを強く願っています。
- 「深い学び」「主体的な学び」といった言葉は今までよく耳にしていたのですが、今回庄司先生のお話を伺って、自分なりに考える事ができました。「学び合い」と「教え合い」は違うということもわかりました。
- 子どもたちが真に学び合う姿について、まだまだイメージできていなかったのですが、映像を見ることで子どもたちの豊かな表情が真の学び合う姿だと知ることができました。今後の授業や研修会におおいに生かしていきたいと思います。同僚性の構築に向けて、自分にも出来ることを探して取り組んでいきたいと思いました。
- 学びや同僚性について周りの先生方と学び合うことができました。同じ思いをもたれている先

生方がたくさんいらしたので、がんばって実践していきたいです。

- 子どもが学び合う場と教師が学び合う場はつながっているんだと、よく分かりました。教員の学び合いの場づくりにもがんばります。
- 「追いつく力」「追いつかない力」という考え方が、新鮮で興味深かったです。「学び方を学ぶ」ことの大切さが分かりました。
- メンターチームの話、大変興味深く聞かせてもらいました。民間企業からコーディネーターになりましたが、教育の組織は少し特殊に感じます。メンターチームも、トップダウンの形をとらないと難しい気がします。

(9) 前回の研修内容を実践に活かしたかについて。※複数回参加した方対象。

活かした：6名

- 雑談のついでに、児童の話混せて、情報提供や先生の大変さの共感をした。

〈講義〉(120分) 動画を見ながら、流動的にグループ討論を行った。

1. 学び

- 「学び」における子どものわくわくの意味…わくわくをもつことは、年齢を重ねても「学び」の原動力となる。
- 子ども一人ひとりへの「学び」の保障…分からないことが「分かる」体験・知らないことを「知る」体験。
- 「分かりそうで分からない」「もう少しで分かる」子どもに対して、「分からない」をそのままにしない。教室全体が子どものメッセージを“聞く”“聴く”“訊く”場所であるということ。

2. 学び合う

- 「学び」は“個”つまり自己内対話。そして、「学び合う」には“他者”との対話が必要となる。
- 対話が苦手な子…得意不得意の違いは経験回数という視点。…「分からない」ことが「分かり合える」「話し合える」クラスが存在が大切。一人ではできない対話が他者と関わることによって可能となる。
- クラス全員参加のディスカッション(ビデオより)…誰も外れない、全員参加の話し合い。その土台づくりは1学期から始まっている。4人など少人数でディスカッションしていく。
- 話し合うクラスの土台…時間がかかっても初期の土台作りのプロセスを大切に、丁寧に進める。土台を作った子ども同士が繋がることで、その後の進みはスムーズになる。
- Teach…課題設定・学びをデザインする・考えさせる・対話・繋ぐ・聞く・聴く・訊く。

3. 同僚性…教師がつながる。校内研究会としての同僚性

- 研究会のもちかた…①子どもの事実(行動・発言・態度・様子全体)を見る。②エピソードから現れる子ども自身の姿と、その「人」自身としての語り手(教員)の姿③研究会で見える“学び観・授業観・子ども観”について、教員自身も聞き合うことでそれぞれが大切にしている“観”を共有する⇒同僚性
- メンタリング(埼玉大学教職大学院 さいたまま市立宮前中学校 原 畠 淳一郎 先生より)：メンタリングを取り入れた人材育成について。

4. まとめとふりかえり

- 学校における“学び”とは…子どもの学び合い、
教員同士の学び合い。そして、保護者と地域との繋がり。



（６）プログラムの評価

本プログラムには、これまでに、91名（延べ243名）が参加した。内訳は市教育委員会5名、管理職3名、教員（通常学級）15名、（特別支援学級・学校）18名、養護教諭2名、臨時的任用教員15名、スクールアシスタント13名、さわやか相談員8名、キャリアカウンセラー1名、学校地域連携コーディネーター4名、GS（非常勤講師）1名、大学院生5名、大学生1名であった。

本事業の評価を行うため毎回研修終了後のA4用紙1枚のアンケート、複数回（7回以上）参加者への聞き取り、最終回での複数回（3回以上）参加者に対するA3用紙1枚のアンケートを実施した。

① 毎回のアンケートから

本プログラムへの参加者には、期待通り様々な職種の方々がいた。どの職種の方にも適した要望に応えることは難しいが、多くの参加者に「研修内容の理解」や「実践方法や考え方などの知識」を深めてもらえた。また、「実践への意欲化」も高めることができた。しかし、様々な校種や職種が交わるように5人程度のグルーピングをして、その活動（演習等）自体は好評であったが、なかなか十分な時間を確保することができず、話し合いや悩みの共有まで深まらずに満足感を得られなかった人もいた。また、実践意欲はあるものの、実践するまでには至らなかった人も多かった。しかし、数名ではあるがそれぞれの立場でできる取組を実践している人もみられ、研修会の最後の諸連絡の中でその一例として「同僚の先生方に資料を配付する」「管理職に報告する」などを紹介することもあった。研修会の周知については、学校への案内文書の効果がみられたが、各学校において対象となる方々すべてに回覧できてはいなかったようである。今後はターゲットを絞っていく工夫や、さわやか相談員やスクールカウンセラー等の集まる研修会に出向いて紹介したり、年度当初でなく機会があればその都度、その場でチラシを配付したりすることも実施していく必要性を感じた。また、センターのホームページを見て参加した人は少なく、ホームページを見やすく分かりやすくしたり、関心をもってもらう工夫をしたりする必要性を感じた。

② 複数回（7回以上）参加者（4人）への聞き取りから

複数回参加している方は学ぼうとする意欲が高い。自主的にいろいろな研究会に参加している人もいれば書籍で学んでいる人もいる。学ぶ機会が少ない方々にとって本プログラムは貴重な研修の機会となっていると考える。また、臨時的任用職員やスクールアシスタント、さわやか相談員などは、日々特別支援教育について相談できる時間や人、内容を持てずに悩んでいることが分かった。さらに、皆さんはいろいろな教職員と積極的に関わろうと報告、連絡、相談、確認などに尽力していた。学校が組織としてうまく工夫をしているところでは、人間関係も良好になり情報共有が図られているようだ。

学んだことを実践していくことはうまくいくこともあればそうでないこともあり、なかなかハードルが高い。しかし、学んだことを共有でき、効果を見せるところまで組織が機能していけば、教職員一人一人が指導や支援に自信をもつことができると考える。

③ 複数回（3回以上）参加者（30人）への最終回アンケートから

本プログラムに関して「諸課題の取り上げ方」「ねらいの明確化と適切な内容」「意欲を高める工夫」「適切な資料と説明」「論理や考え方、実践方法の学び」なども項目は、参加者にとって好評であった。特に「論理や考え方、実践方法の学び」については評価が高かった。このこと

は、受講者自身の変容にも現れ、「学び続けようとする意欲」の高さにつながったと考える。さらに、演習におけるグループ協議や研修会の期間をあけて実践の場を確保することで、多様な職種の教職員との協力を意識化することもできた。しかし、「教職員としての自信」は3人に1人の割合で高まらなかった。本プログラムの有効性についての回答においても「教職員としての自信」については課題があることが分かった。今後、その視点については検討が必要だと考える。

「児童生徒を見る目」に対して、3人のうち2人は「かなり有効」だと回答していた。これは、すべての研修会において一貫して大事にしていた考え方であったため、受講者にとって強く心に残ったのだと考える。このように目指す教師像の視点をすべての研修会にちりばめておくことで、研修会の一貫性をもたせることは重要である。

本プログラムの実施に際しては、講師の方々から推奨する書籍を募り、46冊整備した。研修会の前後や休憩時間に目をとおす姿も見られ、受講後に借りていく方も延べ48名いた。今回の対象者にとって、このような自主（個人）研修は「大いに必要である」との声が9割で、第10回研修会後には来年度の実施についての問い合わせが多く寄せられた。今後は、「長期休業中に複数の内容を実施する」「託児サービスを取り入れる」「利便性のよい会場」「参加者のニーズに応じた柔軟性と焦点化」など更なる工夫改善を加えながら継続した研修の実施が求められている。

Ⅲ 連携による研修についての考察

1 連携により得られる利点

今回、多くの教職員が参加し、特に臨時的任用教員やスクールアシスタント、さわやか相談員など日頃研修の機会の少ない方々の研修の機会になった。また、専門的な講義を受けた後に様々な職種の方々がグループで事例について協議することで、参加者にとって、特に「専門的な知識や技能」、「学び続けようとする意欲」、「実践的行動力」、「児童生徒を見る目」、「（多様な職種の）教職員との協力」について参加者自身が高まったという意識をもつことができるとともに、本研修会の意義を感じてくれた。

2 今後の課題等

研修のさらなる参加者の確保と継続参加者の増加が課題である。そのためには各学校や対象者への情報提供を含め開催案内の工夫、交通機関や子育て家庭等に配慮した研修会場の確保、学校行事や天候、実施時期等を考慮した開催日程、研修内容を複数組むことによる研修回数の縮小、さいたま市のみならず埼玉県内に参加対象の拡大、より組織的、実践的な指導・支援につなげるために管理職やミドルリーダーの参加促進と実践的指導者の要請、研修会資料の一般への情報提供など、よりよく改善していく必要がある。また、それぞれの職種の方々が自信をもって教育活動に従事できるための方策について研究していきたい。

3 連携を推進・維持するための要点

市教育委員会では、今後教員育成指標の策定に伴い、研修の体系化、精選などが行われる。その中で、大学としては市と協働して研修を企画・実施できるよう教育実践総合センターや附属学校園、教職大学院などを活用していくことが考えられる。また、研修の機会の少ない非正規教員などの学びたいという意識のある教職員に対しては、自主的・自発的な研修の場として本プログラムを継続して実施していきたい。さらに、さいたま市だけでなく埼玉県の教職員に

対しても同様の研修を広げてきたい。

IV その他

[キーワード] 資質・能力の向上 特別支援教育 チーム学校 講義・演習 正規採用教員
非正規採用教員 臨時的任用教員 さわやか相談員 スクールアシスタント

[人数規模] D (補足事項 全10回の実施に対して91人のべ243人が参加した)

[研修日数(回数)] C (補足事項 全10回実施し、参加については毎回任意である)

[問い合わせ先] 国立大学法人 埼玉大学 教育学部附属教育実践総合センター

教授 尾崎 啓子 教授 河野 秀樹

〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255

TEL/FAX 048-858-3142/048-858-3690

E-mail ikusoumu@gr.saitama-u.ac.jp

さいたま市教育委員会 学校教育部 教育研究所

主任指導主事兼係長 安島 俊之

〒330-0064 埼玉県さいたま市浦和区岸町 6-13-15

TEL/FAX 048-838-0781/048-838-0888

E-mail kenkyujo@saitama-city.ed.jp